

山下善明先生を送る

秀 村 研 二

山下先生と言わなければならないのだろうが、個人的にそう呼びしたことがあまりないので、山下さんと述べさせてもらうことを最初に断っておく。

山下善明さんは富山県は高岡近くの砺波平野の片隅、裏山からは立山連峰を望むことの出来る村の出である。雪深い富山の田舎から大志を抱いて東京に出て来た、という時代がかっていると思われるかも知れないが、私のみるところではそうである。お父上は農業と共に越中富山の売薬をされていた。ご本人の弁によれば、小さいときから利発で神童と言われていたそうである。ご本人が仰るのだから、多分そうなのだろう。おまけに早くから自我に目覚めてしまった少年は、哲学の途を求めて東京に進学する。山下さんには、出て行かざるをえなかった故郷の村に対する、一種独特なアンビバレントな感情があるように思う。それはお母さんやお兄さんなどの家族にも向けられる。複雑なのだ。面倒だ、厄介だと言っても良いかも知れない。この面倒くさは、日本にも向けられる。日本の村の前近代性を超克したいと願いつつ、逆にどこかで自らの帰る場所としているところからきている、などと知ったふうなことを言うと、山下さんはきっと即座に否定して「馬鹿なことを言うな」と叱るだろう。

私と山下さんの関係を一言で言えば公私ともに、迷惑をかけ、またかけられたというところではないだろうか。最初の出会いは私が明星大学に就職した1990年の日野キャンパスでのことであつたがあまり記憶がない。研究室はさほど離れていなかったのだが2年間で二言三言言葉を交わした程度だったと思う。親しくなったのは青梅キャンパスが開校した1992年以降のことだ。

まず山下さんの専門について少しだけ触れておこう。私は哲学に関しては門外漢なので全くわからないのだが、山下さんの専門は哲学、それもハイデガーの専門家であるらしい。業績を見て想像して頂きたい。随分前だがご本人から、日本の哲学界に少しでも寄与したと遠慮がちに仰ったのを聞いたことがある。哲学についてはよく分からないからそのまま信じよう。ところで山下さんは、時々、ストンと心にはまる良い言葉をなげかけることがある。その時には、「さすが哲学者」などと思わされる。そして学問の基本はやはり哲学だ、と思わさせられてしまう。山下さんはハイデガーに加え西田哲学の専門家でもあるらしい。話を聞いていると、多くの哲学者を気持ち良さそうにばっさばっさと切り捨ててしまう。まるで自分が一番かのようなそんな感じなのだが、自信過剰という訳ではない。

ところで面白いのは、哲学者だから論理的だろうと思っていると必ずしもそうではないことだ。昨年の夏に亡くなった、青梅キャンパス日本文化学部初代学部長であつた井上英

明先生は山下さんを「演歌の哲学者」と評した。言い得て妙である。山下さんが演歌であると言う訳ではない。ただ時に授業で本当に演歌を歌っていたらしく、授業内容の説明のためとは言えざや学生は当惑したことだろう。井上先生は、山下さんの哲学が最後には論理と言うよりは情の世界に入っていくので、「演歌の哲学者」と言ったのだった。論理の世界で最後まで押し通せないところに山下さんの魅力があるのだと思っている。

そんな山下さんと青梅校から日野校に移った2010年度から全学共通科目「人類と環境」の授業を、生物学の篠山浩文さんとともに担当した。三人の専門の異なる教員が全部の授業に共にいるという、ちょっと変わった授業である。新しいカリキュラムを造るにあたっていわゆる教養科目（全学共通科目）から環境に関する科目が無くなるということで新たに設置した。三人の教員が、それぞれの専門から環境に対して語り、お互いに批判し合いながら授業を進めるというもので、どこまで成功しているかはわからないが、学生には刺激になっていると思う。私は山下さんから、「今、秀村先生が言ったのは間違いです」と全面否定されたり、また「秀村先生は相対主義者です」と言われてしまったりもする。私も「山下先生の今の言葉に騙されてはいけません」などと言っていたが、これは教員同士の信頼がないとなかなか難しい。青梅時代からのお酒の席も含めての蓄積の上に成り立ち得た授業だったということができよう。私たちが言い合うと、「先生たちは喧嘩しないで仲良くして下さい」とリアクションペーパーに書く学生もいないわけではないが、討論を楽しんでくれる学生は一定数いる。この授業の前提として青梅キャンパスの科目があったと思っている。

2000年代の初め頃だったとおもうが、カリキュラム改革の一環として科目区分としての学部共通科目が設けられた時、青梅校は一学科の学部が二つある（日本文化学部と芸術学部）状態だった。学部共通科目を設けることが出来ないのであるが、いわゆる教養科目と専門の学科科目を繋げる意味と、専門横断的でまたより広い視野を持たせる科目をつくる事が出来ないかと考えた。当時一般教育委員長をやっていた山下さんを中心として作りあげられたのが、一般教育科目Ⅱ類というものだった。科目名を見ると「ことばと文化」「かたちと文化」「こころと文化」「うつくしさと文化」などというものが並びそれぞれに8科目ほどが用意され、今見ても斬新だったと思わされる（内容については個々の教員の問題であるが）。例えば、生物学としての「うつくしさと文化Ⅰ（植物）」や数学の「うつくしさと文化Ⅱ（曲線と曲面）」と言うような具合に、従来の学問分野にとらわれない構成で、これは山下さんあってこそ出来上がったものだった。

一般教育委員長をやっていた山下さんは教務関係で各学科に説明をして廻るのだが、時にいざこざを起こしてきた。哲学者であるからというよりは、それは山下さんが理と義の人だからだ。山下さんが人を説得しようとする、ご本人にはその気がなくても理と義とで説くので上手いかわからないのである。これは理念よりは現実（利）を重視する日本の文化の問題でもあったとも思われる。そして山下さんは自分は間違っていないからと言って全く態度を変えない。変えないところが偉い、とも言えるのだが周囲にいる人間としては事後対処に苦勞をする。相手を説得する時には、レトリックを使わずに、箇条書きで言った方が良いですよと何度忠告したかわからないが最後まで変わらなかった。私だったらすぐに変節してしまうのだが、この変えない変わらない点は今では評価できる。

これは山下さんの大学や大学人に対する大きな肯定的な評価があったからだと思う。現

実はどうであれ、こうあらねばならないという理想をもって物事に対処する、その姿勢の表れだった。大学や大学人は高い理念を持っている、もしくは持っていないといけないと思っているのだ。私などは現実からしか発想しないので、山下さんからはその考えの浅薄さを何度指摘されたかわからない。私には日本の大学なんてこんなものさという判断があるのだが、山下さんは違う。山下さんのような態度を持つ人が現在の日本社会では本当に少なくなってしまった。理や義を説くよりもどうやったら上手く切り抜けられるかばかりを考えているのが今の日本だ。理想を高く掲げるべき大学自体がそうである。そのような意味では、山下さんのような理と義の人は絶滅危惧種なのだ。その絶滅危惧種である山下さんが明星大学から去るのは実に惜しまれる。

青梅校時代は一般教育委員会、日野校では2017年度まで全学共通教育委員会に所属していた山下さんには、いわゆる制度的な演習科目を持つ機会がなかった。しかしダンディさも理由としてあったのかもしれないが根強い山下ファンの学生たちが常に周囲にいて、そのような学生たちとは卒業後も個人的な付き合いをずっと続けている。それは教師としての山下さんの魅力を語るものだと思っている。

さて私には退職後の山下さんにやってもらいたいことがある。大学をはじめとして日本の社会は短期的な効果ばかりを求めるようになってしまった。だから山下さんには預言者のように、あるべき姿を指し示す役割をして欲しい。でも今の日本の状況では、その言葉が聞きいれられることはまずないだろう。いつの世でも預言者は孤独なものだが、山下さんが愚痴を言いたくなったら明星大学に来て、我々に文句を言ってもらっても構わない。もちろん二度と聞きたくないという人もいるだろうけれども、少なくとも私は聞く覚悟を持とうと努めるつもりだ。自信はあまりないけれども・・・。

最後に、年齢が少し離れていた私は、山下さんたち団塊の世代に対して遠慮なく相当生意気に文句を言ってきたのだが、ここで深くお詫びするとともに感謝したい。